



ポナペで1858年に出版されたポナペ語教科書
出典：Specimens of printing at Ponape [microfilms]
(1857?) Ponape: s.n. / Hawaiian Mission Children's
Society 所蔵

立しません。南の島では、これが彼らにとっても楽しいプログラムで、歌うために教会に集まってきたという面もありそうです。

それは置いておきまして、信者になったら必ず身につけなければいけないことの1つが讃美歌が歌えるということです。教会に集まってきたものの、誰も讃美歌が歌えないでは、礼拝になりません。ですから言い換えますと、信者さんを作り出すためには音楽教育が必要なのです。そもそもヨーロッパでも音楽教育の起源の一つに教会での歌唱指導があります。という理由で、宣教活動の中に現地の人たちに讃美歌を教えるという活動が当然入ってきます。

§ 11 讃美歌集の仕事

——今讃美歌が話題になっていますが、讃美歌といいますが私たちでもいくつか聞いたことはありますが、具体的に目に見える形では、今でも本屋さんに行きますとあるコーナーで売っていますね。讃美歌集というのがありますね。あれが一つのそういう活動の形なのでしょうか。

ええ、そうなんです。いわゆる現地で、例えば日本なら日本にいた宣教師たちは讃美歌集を出版します。それは英語の讃美歌集をそのまま日本で出版するのではありません。大きな仕事は、英語で書かれた元の讃美歌の歌詞を翻訳することです。

伝道活動の一番はじめの頃は、原語である英語でそのまま歌うということはあったと思いますが、いつまでもそういうわけにはいかない。やはり現地にキリスト教が根づいたという証拠、あるいは根づかせるためには、日本の場合ですと讃美歌をどうしても日本語で歌わなければいけない、そういうことが起こってきます。そこで英語の讃美歌を日本語に翻訳して歌わせる。そしてある程度その翻訳が集まった時に日本語の讃美歌集として出版する。こういう形になるわけです。

―なるほど。歌詞を日本語に翻訳することで日本語の讃美歌集が出来るわけですね。ある意味ではそれは音楽の教科書ですね。その教科書によってキリスト教信者は讃美歌を覚えていく。そういう経過になるわけですね。

全くその通り、そのように考えてもらっていいと思います。

§ 12 宣教師は歌が上手だったのか

―よく分かりました。キリスト教の布教にとっては讃美歌を教えるという教育活動が重要であった、ということですね。だったら、宣教師は歌も得意でなければなりませんね。実際そうだったのですか。

中にはね、日本の場合でも、もともと音楽の得意な宣教師もいました。でもそのような宣教師は歌を歌いに来たのか伝道に来たのか、と揶揄されるようなこともあつ